

“MY TOWN” うおっちんで

歩キ目デス & 足ラテス

Vol.47

『歩く、見る、ということ』

岡崎 直司

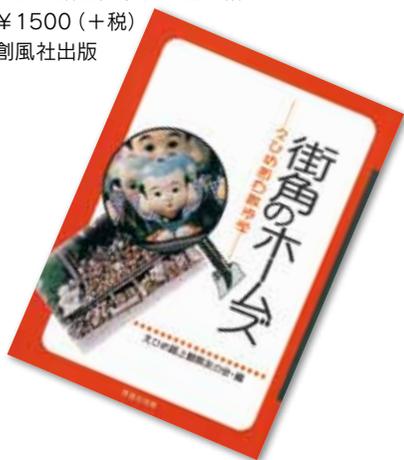
タウンツーリズム講座主宰・
ヘリテージマネージャー

はてさて、今回は100号記念ということで、これまでのウォッチングについて、色々振り返ってみることにしよう。ウォッチング業界（そんなのが在るか無いか知らないが）では、〃振り返る〃という行為はとても大切。何故なら、道を歩く時など、よく振り返った時に驚くような発見をすることがママあるから。つまり、同じ道での同じ方向でも、視線の先を180度ターンさせてやることで、それまでとは全く違うモノが見えてくる。人は振り返らねばナラナイ。

そもそも筆者がこの病にかかったのは、1987年（昭和62）の夏に遡る。当時売り出し中の建築史家、藤森照信（とうもりてるの）東京大学助教授を招いての講演会（県建築士

会主催）が松山であり、路上観察の手法による映像を見せられた。その中で、既に東京で赤瀬川源平氏らと路上観察学会を立ち上げていた氏は、こう宣った。「愛媛、特に松山という町は正岡子規を輩出し、俳句王国だけに、その観察力は路上観察者の資質を十分に備えている。」と。実際に、何とかもおだてりや木に登るが如く、その後たちまちの内にウォッチン

「街角のホームズ・えひめ面白散歩学」の本
えひめ路上観察友の会・編
¥1500（+税）
創風社出版



グ好きな同好の士が集まり、「えひめ路上観察友の会」が誕生したのだから、氏の講演の影響は大だった。その場にモチロン筆者も居合わせた。

それからというものの、休日には必ずどこかへ出かけ、やれマンホールがどうの、やれトマソンだ、県下初の純粹階段だと一喜一憂し、メンバーは県下各地に出没することに。やがてその各自が歩き

回った成果として、「まつちかタウン」で何回か「面白ウォッチング写真展」を開催して市民認知も得ていった。我々の眼力も上達した、あれは確か1994年から愛媛新聞の中予版にコーナーを頂戴して、路上観察の連載が始まった。メンバーが交替で記事を寄せつつ3年間ほど続き、それを元に2000年に上梓したのが「街角のホームズ・えひめ面白散歩学」。会員10名による編集には苦労もあつたが、各人各様の違う見方がテンコモリ。愛媛を眺めるに、こんなに面白い本は他に無い。きつと読む人はモノの見方が変わり、この一冊があれば、どこを歩いても楽しくなることウケアイ。ウォッチャーオカザキウソイワナイ。

この「舞たうん」誌でも連載が始まったのが1997年10月号からだから、もう足掛け12年になる。ということは、いつの間にかモー千支一回り、丑歳から丑歳へ。さりとて牛歩と言うなかれ。着実な一歩を記してきた、とそう思う：思いたい：思わせて。

藤森氏の講演からすると、22年が経過。沢山モノを見ると目が肥えると言いが、果たして筆者の目はどうか、そう言えば今ナンダカ腫れぼったい。いや、これは花粉症のせいか。ここで少し、理屈とウンチクをたれてみたい。歩く、見る

について。

ある時、かの日土小を設計した故松村正恒氏が、「木と交わって学べよ子供、それが学校」だと言われた。つまり「学校」の字を分解して言った訳だが、漢字には本来その字自体に意味があるというこの分り易い例え話は、今も鮮明に頭の中にインプリントされている。その伝で行けば、「歩く」は「少し止まる」ということになる。その少し止まりながら歩く時に「見る」行為が、即ちウォッチングなのだが、では「見る」とは。目玉は動き回ることを意味する。目玉だけジッとさせていたのでは世界は広がらない。目を様々な場所へ運んでやるための足を使う行為、それが「歩く」。だから、「歩く」と「見る」は不可分の関係にあり、一心同体なのだ。従って、ウォッチングの極意という

と大げさだが、筆者はいつも「目玉の散歩、四歩、五歩。」という言葉愛用して楽しんでる。自由自在に目を遊ばせることが出来たらどんなに素晴らしいだろう。

ただし好事魔多し。油断大敵。ここで大事なことがある。目の性能について。いや、何も視力検査をしようというのではない。目をどう磨くか。今慌てて目薬

を出してきても間に合わない。そういう問題ではない。「ケンシカンカン、ウォッチング進化論」について。

まず初歩段階。「見る」はまだ見方としては甚だ浅く、焦点が定まらない印象。一目見ただけではナカナカ「覚(憶)える」という領域にまではいかない。この「見」に示す偏をつけてみると「視」。この「視」だとかかなり対象が明瞭に頭にイン



大洲祇園神社の瓦製牛



マンホール蓋「宇和島市・牛鬼」

プリントされそうだ。凝視とか、視線の対象への固定時間が記憶量に比例する。でもまだ足りない。続いて「観」。この「観

る」は、識者曰く、鼻の上に両方ある目のことではなくて、「心の目」つまり「心眼」でモノゴトを観るんだそう。「観察」というのはその位奥が深く、だからかの二宮忠八翁はライト兄弟よりも早く飛行原理にまでたどり着く。歩く巨人、

民俗学者の宮本常一氏しかり。これ全て観察力の成せるワザ。剣豪宮本武蔵の五輪書にも曰く、「見の目弱し、観の目強し」という下りがあるそう。幾多の修羅場、死線を越えたお方の重なお言葉。

これにもう一つ、現代の世の中を見るにつけ、「目に手をかざしたい」。寝不足で太陽光が眩しいのではない。目に手を加えたと「看」。愛があふれる看護の

「看」。これがホントの「手当て」。この「看る」は、人に対してだけでなく、地域に対しても当てはめると、もう少し人が人間らしさを取り戻せる。環境的にも景観的にも人はもつと優しくなれる。これが『見視観看ウォッチング進化論』……とここまでノーガキを書いて、何やら後ろにカミさんの視線が。いや、気のせいかな、「そんなに見えることがよー分かって、何でワタンが見えんの？」これは幻聴か。たまた幻視か。

(注)トマソン：「不動産に付着していて美しく保存されている無用の長物」と赤瀬川原平氏によって定義つけられた超芸術トマソンのこと。かつて読売巨人軍に在籍していたゲーリートマソン選手が、バットを振るも不振に終わり、図らずもその代名詞となってしまった。